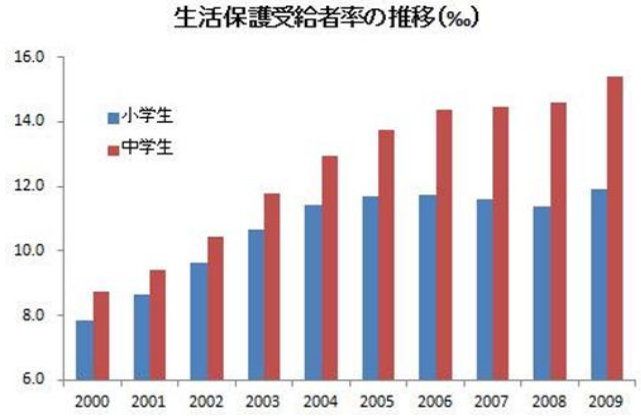
すべての子ども・若者の幸せを願って

～私たちが見てきた
支援が必要な山梨の子ども・若者の姿～

厚生労働省が発表した子どもの貧困率は 15%。つまり、子どもの 6.4 人に 1 人の割合にのぼっています。
人口規模では約 323 万人の 18 歳以下の子どもが相対的貧困状態となっており、少子化にも関わらず 3 年前と比べて 23 万人も増加しました。
今の子育て世代は非正規雇用が当たり前になり、ひとり親家庭も増え、不安定な生活の中で子育てを余儀なくされています。
精神的な余裕のなさで、子どもたちの発達面に影響を与えるリスクは高くなります。子どもと接する時間（6 歳未満の幼児を養育しているひとり親家庭の場合は平日平均で 46 分、共働きの同条件の平均は 113 分、専業主婦も含む夫婦世帯の場合は 196 分）もひとり親家庭では少なくなっています。
このような現状を踏まえ、青少年の健全育成を図っていくために、青少年本人やその家族への支援を県全体で取り組んでいく必要があると考えます。
山梨県は高齢者・未就園児に対する社会的支援は比較的あるように感じますが、反抗期に入る子どもや思春期の若者に対する支援施策は非常に少ないように思います。



以下は、私たちが山梨で見てきた子ども・若者の姿の一例です。
周囲からの支援が必要な子ども・若者はまだまだ多いこと、少しでも知ってもらうきっかけになればと思います。

- 修学旅行の積立金が未納であることから修学旅行への参加が親の判断に委ねられてしまうため、事前の学習やグループ分けに身が入らない。最終的には修学旅行に参加できず、修学旅行中は学びから除外され、終わった後の感想文や卒業アルバムの修学旅行のページや同級生との思い出話に欠落した部分がある子。
- インフルエンザの疑いがありながらも、国民健康保険税を親が滞納して保健証が窓口留め置きのため手元になく、診断が受けられずに出席停止にもなれない子。
- 4 月の入学時には出費も多く、制服代の工面ができずに入学式を欠席した子。
- 夏休みなど給食のない期間に体重の減る子。
- 母親がWワークで、3 食を一人きりで食べなければならない子。

全国で155万人以上7人に1人の小中学生が、学校で学習をするために資金的な支援を必要としています。
（就学援助認定）

- ユニフォーム代などを気にして部活に参加できない子。
- 歯の治療代がなくて、年中偏頭痛を訴える子。
- 借金取り立てや督促状が毎日続き、車上生活の末に祖母と兄弟 3 人を置いて母親が失踪、児童相談所へ措置された子。

経済的事情で働きながら定時制に通い、最低賃金以下でいくつもの早朝や深夜バイトを抱え、心も体も疲れ切っている子。

どうすれば、この子どもたちが希望を持って生きられる環境を作ることができるのでしょうか？この子どもたちからの問いに、私たちは明確な答えをまだ持っていませんが、何とかしたいという思いを抱えた人はたくさんいるのです。

子どもは親を選べません。子どもに自己責任論は当てはまりません。子どものスタートラインからの差を断ち切り、負の連鎖から抜け出し、若者が自らの力で将来を切り開くために、今必要な事は何か。

若者が、親が、地域の大人が、「学ぶ・学びなおす機会（場）の保障」、若者の幸福指数を増やすネットワークを持ち、たくさんの意志と願いを込めて大人がつながることなど取り組むべきことはたくさんあります。

見えにくい子どもの問題を可視化し、子どもが幸福感を感じられる社会とはどういう社会なのか・・・

想像力を創造力につなげて、一歩を踏み出しましょう。

しんじくんは、中学二年生のとき、しんぶんはいたつをはじめました。はじめは、朝しんぶんはいたつをしてから学校に行っていましたが、だんだんつかれてきて、学校に行くのがやになってしまいました。

しゅんたろうくんは、高校一年生のとき、おなかがいたくなるようになりました。そのせいで学校にいけなくなりました。それでもすこしお休みをして中よう高校に行き、大学もそつぎょうしました。

でもなかなかしゅうしょくができません。

今、お話しした二人は、残念ながら、もう、この世にいません。

しんじ君は、中学校２年生の時、両親が離婚。母子家庭となった家計を助けるため、朝の新聞配達を始めました。配達の疲れから、週２，３日遅刻をするようになり、中学校３年生になる頃には、登校拒否になりました。中学校卒業もままならないため、高校進学もできず、白血病を患い亡くなりました。
しゅんたろう君は、高校入学後、すぐに原因不明の下痢に悩まされました。精神的なものと診断され、様々な治療もなされましたが、授業中に何度もパンツを汚す切なさから、結局、高校を辞めました。それでも何年か休養し、大学まで卒業したのです。
しかし、あの頃の経験は、就職活動を阻みました。もちろん、アルバイトもしましたが、なかなか就職が決まらないため、鬱病になり、自ら命を絶ちました。

しんじ君も、しゅんたろう君も、私の大切なお友達でした。

私は、二人を思うと、今でもたくさんの涙が出ます。そして、もっと何か出来なかったのか！と憤りを感じます。

しんじ君に安心して学校生活が送れる環境を用意できなかった大人やしゅんたろう君の意気込みを汲んでくれなかった企業。もっと、社会全体が、様々な状況の、様々な若者に目を向けてくれていたら・・・悔やむばかりです。

あれから 15 年。社会は彼らに目を向けてくれたでしょうか。
依然として、というよりも、前にもまして、登校拒否の生徒は増え、社会不信の若者は多い。そして、あの頃のまま、自室の扉により、社会を拒否し続けている若者が大勢いるのです。

施策にあたっては、もちろんお金も重要なことですが、やはり『人の手』があってこそではないでしょうか。
「僕のために言ってくれた」、「私のために動いてくれた」そんな小さな手が、彼らを揺り動かし、やがて、彼らが、社会の大きな礎となっていく。

まずは私たちが、そんな小さな『人の手』となって。